

## 関西方言における終助詞ゾの機能

上林葵

共通語の終助詞「ぞ」は話し手の認識の在り方を表し、基本的には聞き手への伝達が意図されない、非対話的性質を持つ形式とされる（日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4』くろしお出版）。対する関西方言の「ゾ」はむしろ対話的場面での使用が通常であり、かつ話し手の特別な心的態度を表す文脈で使用されやすいことから、共通語の「ぞ」とは異なる働きを有している可能性が高い。本発表ではこうした関西方言のゾについて、発表者の内省をもとに、形態・機能・イントネーション等の観点から記述することを目的とする。

ゾの基本的な機能は、事態や状況に対する話し手の「訝り」の感情を表示することである。

(1) 〈課題の提出期限を尋ねられて〉明日や {φ/ゾ}。

(1) でゾを用いない場合、話し手は聞き手の質問への回答をただ述べているにすぎないが、用いた場合、話し手にとっては当然知っているべき情報を聞き手が把握していないことに対する、話し手の訝りの感情が付加される。

ゾは訝りの表示を基調としつつ、とるイントネーション（疑問上昇調・強調上昇調・平調）によってはたらきが微妙に異なる。疑問上昇調のゾは、事態内容に不明点があることを示す。強調上昇調のゾは聞き手の認識の変更を促すはたらきをもち、主に呆れや非難の場面で用いられる。平調のゾは聞き手への事態内容に関する情報要求や認識変更の強要を表し、主に注意や脅しの表現機能をもつ。

疑問上昇調のゾは事態の真偽そのものに対する話し手の訝りの感情を表し、独話の場面でも使用が許容されるなど、対話的性質が弱い。対する強調上昇調・平調は事態内容の真偽を問うというよりも、聞き手の認識や態度への訝りを表すという点において対話的性質が強い。一般に他者への問いかけを行う疑問上昇調の方が対話性を持ちやすいことを考えると、ゾは反対に平調において対話的性質がもっとも強く表れるという点で特徴的であることを指摘する。